

ウェットな夏子

舟橋聖一

新潮社版

ウエットな夏子

昭和三十一年十二月二十一日 印刷
昭和三十一年十二月二十五日 發行

定價 貳百八拾圓

地方
賣價 貳百九拾圓

著 者 舟 橋 聖 一

發行者 佐藤 亮 一
東京都新宿區矢來町七一

印刷者 塚 田 重
東京都千代田區神田神保町三ノ二三

發行所 株式會社 新潮社
東京都新宿區矢來町七一

電話東京三四局代表七一一(八)
振替 東京 八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。)

印刷 塚田印刷株式會社 製本 神田加藤製本所
Printed in Japan

目 次

大阪の宿の夏子……………七

柚子^{ゆず}匂ふ夏子……………壹

夏子の宵節句……………三

酔ひごこちの夏子……………六

青葉若葉の夏子……………二四

ナイト・クラブの夏子……………一四〇

屋形舟の夏子……………一六六

夏子のバスト・ライン……………一五二

憂き秋色の夏子……………一三三

ウエットな夏子……………一四四

装幀・カット
三
岸
節
子

ウ
エ
ッ
ト
な
夏
子

大阪の宿の夏子

自分の家で、佐久間氏と一緒に寝てゐるやうな錯覺が、かすめた。が、次ぎの瞬間、窓から差しこむ朝の光りに、目をひらくと、いつもと天井の木目が變つてゐて、大阪の宿屋の一室に、夏子一人で寝てゐることがわかつた。

御堂筋から、ちよつと入つた所なのだが、その割に静かな家だつた。

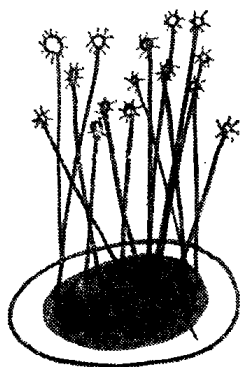
今日は十二月十一日だから、つひにゴールインした佐久間氏と子柴多恵子の結婚披露が、日活會館のシルヴァー・ルームで行はれる日である。

——洗面所へ立つて、口と顔を洗つてゐるうちに、女中が牀をあげておいてくれた。朝御飯の給仕は、また別の女中で、訛がないと思つたら、小田原の生まれだと言ふ。

「まア……あたしは伊豆よ。小田原はどこ？」

「萬年町です」

「なつかしいわ」



大阪には一昨年^{をとし}からださうだ。申だといふから、來年が數への五だ。いきなり、この家の女中になつたので、大阪で知つてゐるところは、道頓堀、千日前、心齋橋筋と、梅田附近だけだと言ふから、それなら、夏子と大した違ひはない。いや、夏子のはうが、むしろ詳しい。四ツ橋、信濃橋、肥後橋、櫻橋、淀屋橋なども知つてゐるし、曾根崎や船場や新町、堀江の廓。それから、大阪城も見たことがある。然し、一人で歩くとなつたら、五里霧中だ。知つてゐるといふだけ、見たといふだけで、どつちの方角か、さつぱり、わからない。

「おくさん、あとから、旦那さんが見えますの」

お兼といふその女中は、飯を茶碗につけながら、訊いた。

「いゝえ。誰も來ませんよ。珍らしい？」

「へえ。大てい、お二人さんがどうございますわ」

「そりやさうでせうね」

「お淋しいでせう」

「別に——却つて氣樂でいゝわ、一人旅のほうが」

「ホホホ」

「出たいときに出られるし、勝手なところへ行けるし……」

「どちらからお出かけですか」

「えゝ。ちよつとね——と言っても、用事ぢやないから、千日前から道頓堀を一まはりして、氣が向いたら、映畫でも見てくるだけよ」

「今夜、按摩さんでも呼んどきませうか」

「さうね、願ひするわ」

「かしこまりました。男がよろしうございますか。それとも、女にしませうか」

「男より女がいくわ」

「へえ——」

御飯がすんで、跡片附けするお兼は、衣紋竹のキモノを見て、

「おくさん——いゝキモノですねぇ」

「さうですか」

「臺所で噂してるんですよ。どこの女優さんかしらつて……」

「とんでもない」

「前に一度、お泊りになつたことがあるんですつてね」

「四年ほど前に……」

「おかみさんが仰有つてましたよ。四年前とちつともお變りがないつて」

「おかみさん、如才ないから……女の四年は、大へんな變り方ですよ」

あのときは、朝方になつて、佐久間氏が來たり、そのあとの諍ひごとや濡れごとまでを、少くもおかみさんにはみんな氣取られてしまつたに違ひない。

一旦、お膳を下げてから、お兼は著換へを手つだつた。

「小田原には、兩親が住んでゐるんですございますよ。でも、大阪のほうが住みいゝ位で、一年に一度、歸る氣もありません」

と、お兼はこつちの訊かないことまで、喋つた。

「では、大阪で世帯をもつ」

「あら、いやだ。まだ、世帯のことなんて、考へたこともありませんわ。でも、大阪の男とは結婚したくないわ」

「やつぱり、小田原の男がいのね」

「とは限りませんが、ホホホ」

夏子~~は~~少々、堅い位に小濱の帯をしめ、帯~~メ~~を結んだ。

それから、茶羽織。

その上に、六分ゴート。ハンドバッグはお兼がもつて、玄關まで送つて來た。

○

千日前から道頓堀。

すべて目新しく、お上りさん気分である。別に何んの技巧もないショーウインドの前に立つて押しずし、太巻き、むしずし、ハムライス、チキンカツなどの細工ものに、見とれたりした。ハツと我れに返る途端、これでは、懷中物をぬかれるぞと、用心した。

人々は、流れをつくつて、あとからく、つぎいてゐる。その間を、無氣味な表情のサンドウィッチ・マンが歩いてゐる。そのために、群集は早足には歩けない。これではまるで、サンドウィッチ・マンは、一度に二つの仕事——廣告宣傳と交通整理を同時にやつてゐるやうなものだ。

夏子は、そのうちの一つの映畫館を選んで、中へ入つた。三十分ほど立見をしてゐると、一つシートがあいた。

映畫の畫面には、豪華なホテルでの華燭の典がうつされてゐる。夏子はヤレ／＼とおもつた。せつかく、忘れようと思つて、映畫館へ入つたのに、選りに選つて、こんなシーンを見せられるのでは、たまつたものではない。

いつそ出てしまはうかと思つたが、我慢して見てゐると、新郎新婦は仲よく、新婚旅行に出る。そして、どこかの温泉宿へついて、ドテラに著換へる。花嫁はすましてゐるが、鼻の下の長い婿殿のはうが、せい／＼サービスにつとめる。花嫁を先きに立てて、長廊下を浴場へ歩いてゆく途中で、新郎が、馴染の藝者とすれちがつて、ドギマギするといった風のドギツい低俗な喜劇物だが、今日の夏子には、何んだか、當てツコすられてゐるやうな氣がした。

それがすむと、ニュース、豫告篇など。そのあと、時代ものがもう一本ついてゐるが、夏子は草臥れて、館を出た。

日が傾いてゐる。

夏子は、さつきから少しもへらない群集の波に押されて、心齋橋筋を歩きながら、下らない妄想を追つぱらふためにも、一々、商店の中をのぞきこんだ。

ヌ 喫茶とやらが禁止され、その代りに、NがMに塗り直されて、モード喫茶になつたといふ趣意を、れい／＼と書き立てた喫茶店があり、その前には、お上りさんらしいのが、みな立止まつて、見物してゐる。中には、聲に出して、その看板の文章を読み上げてゐる男もあつた。

「これだけは、東京にもあらしまへんぜ」

と、説明してゐる中年男もゐた。ヌード喫茶などと騒がれると、女の夏子でさへ、ちよつと覗いてみたいやうな氣になるのだから、男はさぞ、興味をひかれるのだらう。それだけでも、商才とし

ては十分だ。そしてヌードがモードになれば、また、どう變つたかと、一度見たいのが人情である。

ショールばかり賣る店があつたので、夏子は白いモヘヤのショールを買つた。

それから、エナメルエナメルの草履ぞうりも買つた。ノドがかわいたので、お汁粉を食べに入ると、

「あら、小夏ちゃんぢやないの」
と、をかけられた。見ると、新叶家にゐた玉代である。連れは同じやうな風俗の年下の女の人だ。

「まア姐さん」

「いつ、來たの」

「昨夜——大阪見物よ」

「小夏ちゃん、仕合せなンだつてね」

「さア——どうでせうね」

「だつてさ……どこの奥様かと思つたわ」

「姐さんは？」

「あたし。メトロにゐるの」

「メトロつて、あの大きなキャバレ？」

「さうよ……」

「さつき、あの前を通つたわ」

「これから、行くとこなの。四時半に點呼なのよ——今夜、遊びにいらッしやいよ。久しぶりに吞

みませう」

「だつて、女一人ぢやア……」

「かまふもンですか。この頃は、女だけのお客さん、とても多いのよ。變つたわ、時代が……」

「メトロでは、何ンて言つてるの」

「東組A級の珠子つて言へば、すぐわかるわ……ほんとに、いらツしやいよ。あんな大きい規模のキャバレは、東京にだつてないわ」

「さうですつてね」

「一見の價値ありよ」

「ぢやア、あとで行くかもしれないわ」

「かも知れないな言はないでさ。大阪で小夏ちゃんに會ふなンて、ほんとに思ひがけなかつたわ」

「あたしは姐さんが大阪に来てゐることを知つてたから、ひよつとして會へるンぢやないかと思つてたけれど、まさかこんなに早く、會へるとはね……ホホホ」

「あた、何食べるの」

「お汁粉——」

「あたし、おごるわ」

「いゝのよ……」

「まア、遠來のお客さんは、黙つてるもの」

さう言つて、珠子の玉代は、イスを立つて、食券を買ひに行つてくれた。

○

珠子の連れは、一足先きに出て行つたが、珠子はつき合つて、もう一度お汁粉を食べた。

「今の人も、メトロ？」

「さうよ。うちの組なの」

人、ゐるの」

「東西合はせて、千人」

「まあ、そんなに……」

ソロ／＼、暮れかけてきたが、珠代は話しこんで、なか／＼腰を上げなかつた。おかげで、夏子も氣がまぎれた。

然し、段々に、五時といふ時間が、近づいてくる。

この間の招待状によれば、五時には、披露宴がはじめられる。もう、續々とお客が集まつてくる頃だ。新郎の佐久間氏は、モーニングに身をかため、既に會場に到着してゐるだらう。いくら圖太い佐久間氏でも、今日ばかりは、晴れがましい、照れくさい顔をして、新婦のそばに立ち、來賓の客に、一々、頭を下げてゐるのではないか。

新婦の子柴多恵子は、洋装のウェディング・ドレスを著るのか、それとも日本式の桶襦袢姿でやるのか、どちらとも知らないが、恐らくは東京でも有名な美容師が腕にヨリをかけて、美顔術やヘヤー・セットをしたことだらうから、年のほどは、二十も若く、さぞかし花朧かしいお嫁さんが出來上つてゐるだらう。